

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.2

Charlie Parker 【チャーリー・パーカー】

～悲運のジャズ革命家、伝説のバード～



写真提供：東芝 EMI 株式会社

Profile

1920年8月20日、カンサス・シティに生まれる。本名はチャールズ・クリストファー・パーカー・ジュニア。幼少期の愛称は“ヤードバード”、後に“バード”と呼ばれた。11歳の頃に母親からアルト・サクソスを買ってもらい、地元のバンドで演奏を始める。15歳でプロとなり、18歳の時にニューヨーク進出。初のレコーディング体験は40～42年のジェイ・マクシアン・オーケストラ在籍時。41年頃からは、伝説のライブ・ハウス「ミントズ」で、D・ガレスピー、B・パウエル、C・モンクらと夜毎ジャム・セッションを繰り返し、即興演奏に基づいた新しいジャズ“ビ・バップ”を確立する。44年には、ピリー・エクスタイン楽団に参加し、翌45年からは自己のコンボで活動（この時期にマイルス・デイヴィスも参加）、初のリーダー作を録音する。私生活では、愛娘の死などが原因で自殺未遂を回ったり、数々の奇行も目立ったが、多くの伝説と名演を残した。55年3月の「バードランド」での演奏がラスト・ステージとなり、その数日後に胃潰瘍からの出血により、34歳という若さでこの世を去った。死亡時に、医師がバードの実年齢を十数年上回る50代の推定年齢を出したことは有名。10代半ばから始めたドラッグや酒がその命を縮め、あのマイルスも呆れ返るほどの破天荒な人生を送った。バードの名演の大半は、サボイ、ダイアル、ヴァーヴのレーベルに残されているが、その他全ての記録が重要であり、ジャズの遺産である。

バードの絶頂期、サヴォイに残したベスト・テイク集

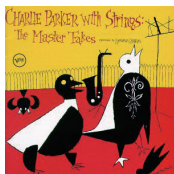


**Bird/The Savoy Recordings
(Master Takes)
Charlie Parker
(コロムビアミュージックエンタテインメント:
COCY-80500)**

Charlie Parker (as), Tiny Grimes (g, vo), Clyde Hart (p), Jimmy Butts (b, vo), Harold "Doc" West (ds), Miles Davis (tp), Dizzy Gillespie (tp, vo), etc

Disc-1 ~ Disc-2 1. Tynny's Tempo 2. I'll Always Love You Just The Same 3. Romance Without Finance 4. Red Cross 5. Warming Up A Riff 6. Billie's Bounce 7. Now's The Time 8. Thriving On A Riff 9. Meandering 10. Ko-Ko 11. Donna Lee, etc.

ストリングスをバックにバードのアルトが最高に歌う



**Charlie Parker With Strings:
The Master Takes
Charlie Parker
(ユニバーサル:UCCV-9112)**

Charlie Parker (as), Stan Freeman, Al Haig, Bernie Leighton, Lou Stein, Tony Aless (p), Ray Brown, Tommy Potter, Bob Haggart, Curly Russell (b), etc

1. Just Friends 2. Everything Happens to Me 3. April in Paris 4. Summertime 5. I Didn't Know What Time It Was 6. If I Should Lose You 7. Dancing in the Dark 8. Out of Nowhere 9. Laura 10. East of the Sun (and West of the Moon), etc.

ビ・バップの歴史的記録を収めたジャズの名盤



**Jazz At Massay Hall
Charlie Parker/Dizzy Gillespie/Bud
Powell/Charles Mingus/Max Roach
(ピクチャーエンタテインメント:VICJ-41046)**

Charlie Parker (as), Dizzy Gillespie (tp), Bud Powell (p), Charles Mingus (b), Max Roach (ds)

1. Perdido 2. Salt Peanuts 3. All The Things You Are 4. Wee 5. Hot House 6. A Night In Tunisia

ジャズと日本格闘技史

バードの存在を日本のプロレス界に置き換えると、「アントニオ猪木」だろう。すると、バードのライバルであり、共にビ・バップ隆盛の立役者であったデジー・ガレスピーは、その誰からも愛されたキャラクター的にも「ジャイアント馬場」になろう。チャーリー・ミンガスなどは、猪木の新日、馬場の全日と捉えたと、その存在は国際プロレスの「ラッシュャー木村」的だ。また、猪木 & 馬場の師匠であり、日本プロレス界の父「力道山」は、「サッチモ」ことルイ・アームストロングあたりが妥当だろうか。

バード(アントニオ猪木)は、マイルス・デイヴィス(ここでは藤波辰巳)ではなく、あえて総合格闘技路線=エレクトリック・ジャズ路線を見出し、猪木に面向かった前田日明が妥当だろう)をはじめ、様々なミュージシャンに影響を与えた点でもその存在感は計り知れない。勿論、アントニオ猪木は今も健在だが、その破天荒振りと存在感のデカさでもバードに酷似する…。以上、マニアックですいません。

一般的にバードの絶頂期は1940年代後半といわれ、ダイアルとサヴォイに残された音源が重要視されているが、この作品はそのサヴォイにおけるベスト・テイクと考えられるマスター・テイクを集めたもの。1944~48年に吹き込まれたもので、「タニー・グラハム・スクインテット」「チャーリー・パーカーズ・リパッパーズ」「チャーリー・パーカー・オール・スターズ」「マイルス・デイヴィス・オール・スターズ」でのセッションを収録。「ピリーズ・パウス」「ナウス・ザ・タイム」「ココ」をはじめ、今や名スタンダードと化したバード・クラシックスを網羅。ジャズに革命をもたらした偉大なインプロヴァイザー、バードの軌跡がここに。

1949~52年にヴァーヴに残された音源から、甘美なストリングスをバックに、そのモディアスなアドリブがことさら胸に染みる名演を集めたアルバム。愛称の「バード」たる所以が、この音を聴けば素直に理解できる。「バリの4月」「エブリシング・ハブズ・トゥーミー」「イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー」は特に心地良いが、如何なる曲を如何なる状況で演奏しよう、その音色はバードそのものであり、全てにオリジナルなバードのさえずりが聴き取れる。管楽器奏者なら誰でも憧れるストリングスとの共演。数あるジャズマン・ウィズ・ストリングス作品の中でも先駆的な名盤であるバードのアルバムがやはり最高!

1953年5月15日、トロントのマッセイ・ホールでの実況録音。ミンガスの独立レーベル「Debut」からリリースされたこの作品は、所々ミンガス自身の手によりオーバー・ダビングされていたという日付なきながら、5人のビ・バップの巨星たちが一堂に会した最初で最後の歴史的記録。コンサート当日、手ぶらで会場に現れ、地元の実験室から白いプラスチック製のアルトを借りて演奏し、アルバムには契約上の問題で「チャーリー・チャン」の偽名でクレジットされたバード。ピークは過ぎていたが、絶頂期を彷彿させるその素晴らしいアルトの音色に耳を傾ける度に、ジャズが熱かった時代にタイム・スリップさせてくれる。

セックス、ドラッグ、ビ・バップ!

ドラッグでハイになっていようが、酒に酔っていようが、人の楽器であろうが、一度アルトを手に入れば、普段通り最高の演奏をしてみようバード。そんなバードは、白人の女性が好みだったようだ。その壮絶で悲運ともいえる人生、常軌を逸した行動の数々は、「セックス、ドラッグ、ロックン・ロール」など、上っ面に思えるほど周囲を唖然とさせた。

C・イーストウッド監督の映画『バード』

1989年に公開されたクリント・イーストウッド監督の映画『バード』はチャーリー・パーカーの生涯を綴った作品。若き日のバードがあまりの陳腐な演奏の為、ソロの最中にシンバルを投げつけられたジャム・セッションでのエピソードは有名。バード役のフォレスト・ウィテカーの熟演も光る。

また、実際のバードの映像としては、『Norman Granz presents IMPROVISATION』がお薦め。バードのスタジオでの演奏風景がバッチリ収められている貴重な記録だ。